

# トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

ISSN 0389-1984

〒163-04 東京都新宿区西新宿 2-1-1

新宿三井ビル 37F

Phone:03-3344-1701(代)

Fax:03-3342-6911

No.78

Dec.1996

## 第79回理事会および平成8年度助成金贈呈式を開催

1996年10月7日(月)、トヨタ財団第79回理事会を都内にて開催した。1996(平成8)年度の各助成対象に関する審議と決定が行われ、その結果229件、約3億3,429万円の助成を決定した。

助成対象内訳は、研究助成56件、1億6,941万円、国際助成東南アジアプログラム59件、669,500ドル、東南アジア研究地域交流プログラム31件、268,100ドル、「隣人をよく知ろう」プログラム日本向け2件、560万円、同アジア相互間9件、104,000ドル、インドネシア若手研究助成56件、104,700ドル、計画助成12件、2,534万円、その他の助成4件、785万円となっている。

研究助成プログラムでは、「多元価値社会の創造」を基本テーマに、若手研究者による自由で創造的な個人研究(研究助成A)および主に国際共同研究を対象とした共同研究(研究助成B)という枠組みで、以下4つの重点課題で公募を行った。

- ・多様な文化の相互理解と共存
- ・新しい社会システムの提案—市民社会の構築をめざして—
- ・これからの地球環境と人間生存の可能性
- ・市民社会の時代の科学・技術

合計832件の申請に対して選考の結果、先の56件が決定された。

東南アジア関連プログラムでは以下の4プログラムで助成を行った。

- ・東南アジアの人々が、「現代社会の文化の課題」を基本テーマに東南アジアで実施するプロジェクトへの助成を行う国際助成(東南アジアプログラム)
- ・東南アジアの人々による東南アジア研究の促進を目的とした東南アジア研究地域交流プログラム(SEASREPプ

ログラム)(語学研修助成 客員教授招聘助成 東南アジア研究奨励助成 地域共同助成の4サブ・プログラムからなる)。なお、当プログラムは国際交流基金アジアセンターと共同で実施している。

- ・日本と東南・南アジア諸国間の相互理解の促進を目的に、文学・社会・文化・歴史・経済などの本を相互に翻訳する事業への助成を行う隣人をよく知ろうプログラム
- ・インドネシアの若手研究者を対象としたインドネシア若手研究助成

なお、当財団の昭和50年度以来現在までの累積助成件数は4,283件、助成総額は約100億円となっている。

また、10月23日(水)には、新宿区内のホテルで今年度の助成金贈呈式を開催した。式には、助成対象者、財団関係者など多くの出席者を迎え、豊田会長の挨拶(P2参照)、総理府内閣大臣官房管理室長の来賓挨拶、各選考委員長による選考経過・報告の後、会長より助成金贈呈書が助成対象の代表に手渡された(下写真左が豊田会長)。

なお、終了後には懇親パーティーが催された。



## 東南アジアプログラムと中日共同研究プロジェクトの展開について

トヨタ財団会長 豊田 英二

財団法人トヨタ財団の平成8年度の助成金贈呈式にあたりまして一言ご挨拶申し上げます。本日はご多用のところまたご遠方から多数の方々にご参集いただきましてまことにありがとうございます。日頃は、各方面から多大のご支援ご協力をいただきこの場をお借りして深く感謝を申し上げたいと存じます。

さて、ご高承の通りトヨタ財団は「将来の福祉社会の発展に寄与するため」に「交通安全、生活・自然環境、社会福祉、教育文化等」の幅広い領域を対象とし、また地域的にも日本国内だけにとどまらず海外諸国、特に発展途上国を対象として活動を続けて参りました。

本年度もこのような基本的枠組みに沿って、研究助成や東南アジア関連プログラム等の主要な助成が決定されました。その結果、財団発足以来の累計助成額は本年度末には100億円を越える見込みであります。

### ●順調な東南アジア関連プログラム

さて、トヨタ財団ではこれまで東南アジア地域については東南アジア関連プログラムを中心に特に力を入れて参りました。これらのプログラムはいずれも着実に成果を挙げつつあり、急速な経済成長をとげつつある東南アジアにおける社会問題、環境問題、文化の課題等につきまして、数多くの問題提起とその解決策を示唆することが出来たことは、財団としても大変喜ばしいことと考えております。

その中で、東南アジア研究の現地での地域交流プログラム（「東南アジア研究地域交流プログラム」=SEASREPプログラム）が第2年度を迎え、本格化してまいりました。これは運営に携わるフィリピン、インドネシア、マレーシア、およびタイの大学の先生方によって構成されるカウンシル、ならびにトヨタ財団と共同で助成に当たる国際交流基金アジアセンターのご努力に負うものであり、心から感謝を申し上げる次第であります。

### ●中国との共同プロジェクトについて

他方、中国や朝鮮半島を含む東アジア地域につきましては、従来助成件数も比較的少なく、財団としても長期課題のひとつとなっておりましたが、最近中国におきまして助成を続けてまいりましたプロジェクトの幾つかがいずれも成功裡に進行しておりますので、2、3ご紹介申し上げたいと思います。

初めに、杭州・西湖の水質浄化のプロジェクトであります。助成財団センターの仲介で日本側の財団が協力して助成を始めまして本年が3年目に当たりますが、日中双方の先生方の熱心な活動により大きな成果を挙げております。

次に、杭州市の郊外にある中国水稲研究所におきましても、稲や花を水上栽培することで水の富栄養化対策に効果が大きいことが実証されております。

最後に、湖北省博物館による紀元前5世紀の大型の漆棺の復元プロジェクトも

3年掛かりで完成を見ております。

中国という国はこれ等の事例だけで語れる程小さい国ではありませんが、先方の熱心な取組みを通して、私共も多くのことを学ぶことが出来たと思っております。

これまで中国については日本にとって、「近くて遠い国」であり、政治や経済の分野では時にギクシャクすることもあるわけですが、それだけに財団が環境や文化の分野で中国に対して協力していくことは、両国の将来にとって大変重要であると思われれます。

中国を含む東アジアを一つのコミュニティとしてとらえ、相互の理解を進めていくことが、21世紀に向けてのトヨタ財団の重要な課題の一つであると考えており、長期的な取組みを進めて行く所存であります。

皆様には今後とも何分のご理解とお力添えをお願い申し上げます。

注：本文は、平成8年度トヨタ財団助成金贈呈式における豊田英二会長挨拶からの抜粋です。

## MOX 燃料を評価する

原子力資料情報室・代表 高木 仁三郎

### ●プルトニウム燃料の国際評価

高速増殖炉「もんじゅ」の事故で、日本のプルトニウム計画に内外で大きな関心が集まっている。とくに注目されるのは、MOX(モックス=プルトニウムとウランの混合燃料)を日本全国に49あるふつうの軽水炉で燃やそうという計画(プルサーマルともいう)である。

しかし、プルトニウムは放射能毒性がきわめて強く、また核兵器の材料ともなるので、原発で大量に使うことには様々な問題が予想される。「もんじゅ」の経験で、多くの人が痛感したことは、原子力政策が決定される際に市民が参加した形でその問題について十分な議論が行われる習慣が日本にはなく一行政の独善性に大いに責任がある一、事故が起こって初めて問題が出されるということであった。MOX 計画についても、十分な検討や情報の公開が行われているとはとても言えない。「もんじゅ」事故を受けて、福島、新潟、福井三県知事の連名で首相に対して提出された「提言」(1996年1月23日)においても、MOX 計画が議論不在のまま強行されることへの強い危惧が表明されている。

「MOX 燃料の軽水炉利用の社会的影響に関する包括的評価(通称国際 MOX 燃料評価=IMA)」は、この計画について、安全性・核拡散・経済性・エネルギー政策・人権・情報公開などの観点から総合的に評価し、政策提言も行って、各国政府や広範な人々の活発な議論を促そうという目的で企画された。そして、トヨタ財団の助成(研究助成 B)が決定したの

を契機に1995年11月に、日、独、仏、英の8研究者による2年間の国際的共同研究プロジェクト(代表=高木仁三郎)としてスタートした。産業界や政府と独立の、MOX に関する初めての本格的国際研究として、内外で注目を集め、共同研究に加えて、10名以上の内外の研究者がアドバイザーとして協力してくれることになったのは幸いだった。1997年10月末までに最終報告を完成させ、出版、シンポジウムなどを通じて、その内容を各国政府や広く一般の人々に提起・紹介するつもりでいる。

### ●IMA 京都会議

2年間の中間にあたる1996年の10月に、IMA プロジェクトでは、中間研究会を日本で行うことを企画した。幸い、京都周辺在住の34名の方々の呼びかけで「IMA 京都会議を支える会」(呼びかけ人代表有馬弘毅=核戦争防止・核兵器廃絶を訴える京都医師の会世話人代表)が発足し、全面的に支援協力してくれたので、その会を10月24-26日に京都(京都市国際交流会館)で成功裡に行うことができた。10月24-25日は、研究者による内部的な検討会(ワークショップ)で、これが研究プロジェクトの側からすると京都会議の主目的だった。しかし、内外から20数名ほど共同研究者、助言者が集まるので、原子力資料情報室ではこの機会に研究の中間成果を広く一般に紹介し、また批判を仰ぎたいと考え、公開の中間報告会を同会館のイベントホールにおいて10月26日に開いた。

ワークショップはすべて英語で行われ、内外から合計で200ページを超す論文が寄せられて、大変充実した会になった(主宰者としては盛りだくさんの議論の整理に苦労したが)、ここでは、私たちのプロジェクトを理解してもらうために、「MOX(プルトニウム燃料)を評価する」と題して行われた、3日目の公開報告会の内容を紙数の許す限り紹介してみたい。

### ●中間報告会の模様

午前中は、共同研究者の研究の中間発表が中心だった。高木が、プルトニウム問題の概論を説明し、MOX のどんな点を、なぜ、どのように問題にするかを述べた。原発の使用済み燃料を使い捨て(once-thorough)にせず、そこからプルトニウムを取り出して、燃料として「リサイクル」と言うと、それ自体はよいことのように思える。

しかし、本来は、ウラン燃料を燃やすために設計された軽水炉でプルトニウムを混合した燃料を燃やすことにはいろいろな問題がある。プルトニウムの強い毒性や放射線の増加に伴う燃料の加工や取り扱い上の困難、ウランとの核的特性の違いからくる運転制御や事故対応の違いなどの安全上の工学的側面は、一応国の安全審査でも取り扱われる(我々と評価に違いはあるが)。しかし、プルトニウム燃料を利用するためには、新たに、使用済み燃料の輸送、再処理、MOX 燃料の加工や輸送、さらに廃棄物の輸送と管理、処分などが国際間にまたがって行われる必用が生じ、そのメリット・デメリットを広い視野に立って社会的観点から検討することが必要となる。

報告会では、高木の問題提起の後、M. シュナイダー(フランス、WISE パリ)が

世界の現況について、F.バーナー(イギリス、元ストックホルム国際平和研究所)が、プルトニウムが核兵器の材料物質であることからくるセーフガードや核拡散上の問題を、さらに、A.ロスナーゲル(ドイツ、カッセル大)が社会的制約(人権)について、問題点を具体的に指摘する形で提起した。西尾(原子力資料情報室)は経済性の検討を、M.サイラー(ドイツ、エコ研)は放射性廃棄物の管理・処分(いわゆるバック・エンド政策)の観点からの検討結果を報告した。これらの観点から見ると、MOX 計画にはデメリットが目立つ。少なくとも計画を急ぐ前に広範な議論が必要だというのが、とりあえず中間段階での私たちの結論である。

午後には、政府(科学技術庁)や電力事業者(東京電力)からの説明を受けて討議をしたり、根本の問題に戻って「放射線と人体」についての講演を武部啓氏(京大医)から聞いたり、「もんじゅ」事故の報告を聞いたり、少し間口を広げて議論した。上記以外にも、海外から10人ぐらいが参加していたが、ロシアの原子力放射線安全監視国家委員会の副議長のA.ドミトリエフ氏(個人の資格で参加)、アメリカの核管理研究所のP.レーベンサール氏の2人から米・ロの解体核兵器からのプルトニウム処分をめぐるホットな話題が出るなどした。総じて、大きな問題のあれもこれもを、1日の間に取り扱わざるを得ないので大変だったが、その割に中身が充実していたとおもっている。多くの人々から、そのような評価もいただいた。

この成果を土台に、後一年で一層研究を充実させて、社会に還元できればと思う。

## 中国訪問記

トヨタ財団常務理事 黒川千万喜

先ごろ上海、杭州、武昌(武漢)、北京と中国の四都市を約一週間の駆け足ではあるが訪ねる機会があった。浅学の身には、環境や文化交流のあらゆる場面で顔を出してくる歴史的背景のもつ重さに圧倒される思いで、自分がいかに中国を知らないかを痛感させられる、発見の連続の旅であった。

また、日本とは違う近代化のコースを歩んだ中国が、いまようやくこれまでの軌から解き放されて、都市部の経済を中心に世界の最前線に躍り出ようとしているダイナミズムを実感した。

それに伴う混乱、破壊、跛行があちこちで目につくのも事実であり、とくに天安門事件の後遺症はまだ社会科学の研究者の間に残っているようであった。

今回の訪中の直接の目的は、財団が助成した湖北省博物館による紀元前5世紀の大型の漆棺の修復作業の完成を確認することであったが、これに合わせ上海では、上海博物館の新館のオープニングを見学し、また以下に紹介する助成プロジェクトの現場を訪ね、研究者などからお話をうかがった。さらに、旅程の最後では北京において自然科学基金会および社会科学基金を訪問した。

### ●西湖の水質浄化プロジェクト

このプロジェクトは助成財団センターと中国の自然科学基金委員会を窓口、日本のいくつかの助成財団との協力事業として1993年から始まった。

中国側は、杭州大学の生物科学技術系および杭州市西湖水域管理処の研究

者を中心に、浙江省自然科学基金委員会が支援している。また、日本側は、信州大学臨湖実験所の沖野外輝夫先生を代表に、愛知大学の西條八東先生(研究顧問)、東京農工大学の小倉紀雄先生、国立環境研究所の岩熊敏夫先生、滋賀県琵琶湖研究所の大久保卓也先生などが参加している大変強力な編成である。

これまで、日本の諏訪湖や琵琶湖、霞ヶ浦などにおける水質浄化に関する取り組み状況も、中国側を招き、現場で詳細に紹介されてきた。さらに、数回にわたる中国現地での検討会と日本での報告会を重ね、単なる技術論を越えて日中双方の環境問題に取り組む基本姿勢、さらには科学技術の社会的役割についての議論が深まってきたようである。

今回のわれわれの訪問の直後の10月末(1996年)に、現地において日中合同の最終検討会議がもたれ、報告書の取りまとめに入っている。詳しいことは春頃に完成する報告書を待ちたいが、このプロジェクトの特徴のひとつは、水中植物やタニシなどの水中生物の力を用いたエコロジカルな水質改善策にある。さらに、約100キロ離れた钱塘江から水路を築造し、河の水を取り込んでいる。

訪れたのがたまたま日曜日であったため、西湖は人々で賑わっていた。古来、浚渫を三十数度にわたって繰り返してきたが、その中で作られたもののひとつが、地方長官であった蘇東坡の時代の「蘇堤」である。西湖には庭園風に作られたいくつかの美しい池があり、これを縫うように散策路がつながる。「三潭印

月」はハイライトのひとつであるが、古来、中国の人々がこの自然の造形との対話にこめてきた思いが随所に溢れている。その意味では、この風光明媚な西湖を守ろうとする人々の努力は真剣であり、歴史の中にしっかりと根を下ろした活動である。

世界的にも中国の環境保全の活動は注目を集めているが、EJもこのプロジェクトへの支援を決めたとのことである。

このプロジェクトは日本側の先生方が大変な熱意をもって取り組んで下さったことが先方にも伝わり、予期以上の成果をあげつつある。先方の浙江省、杭州市、杭州大学がいずれもこれからの協力関係の発展を強く希望していたことにもそれが表れていた。

#### ●水上栽培による水質浄化（中国水稻研究所）

1993年の研究助成を受けた宋祥甫先生のプロジェクトを訪ねた。杭州市から一小時間ほど車を走らせると、浙江大デルタ地帯のど真ん中に水稻研究所の広大な敷地と研究棟がある。古来、北の中央からは遠く位置しながら、その豊かな農業生産力をバックに多くの政治、経済のグループが興り歴史に登場する。浙江・上海財閥であり、そのチャンピオンが蒋介石であるという。

宋先生は九州大学で博士号も取り流暢な日本語を話される活発な研究者である。色々なアイデアを駆使して独創的な実験を展開している。この研究のねらいは、稲や花卉等の植物を水上栽培することにより水中の磷などの富栄養分をいかに固定するかにある。スチロールのフロート板に穴をいくつも開けてそこに植物を植える。これにより養分を吸

収した植物の回収管理が容易になる。水上栽培による養分吸収力、浄化力は想像以上であることが分かった。今後の大規模な実地応用が待たれる。西湖に応用してはどうかと尋ねたところ、景観の問題が難しいとのことであった。現在汚れのひどい太湖あたりで可能性を試してみたいといっておられた。

#### ●曾侯乙墓出土の漆棺修復（湖北省博物館）

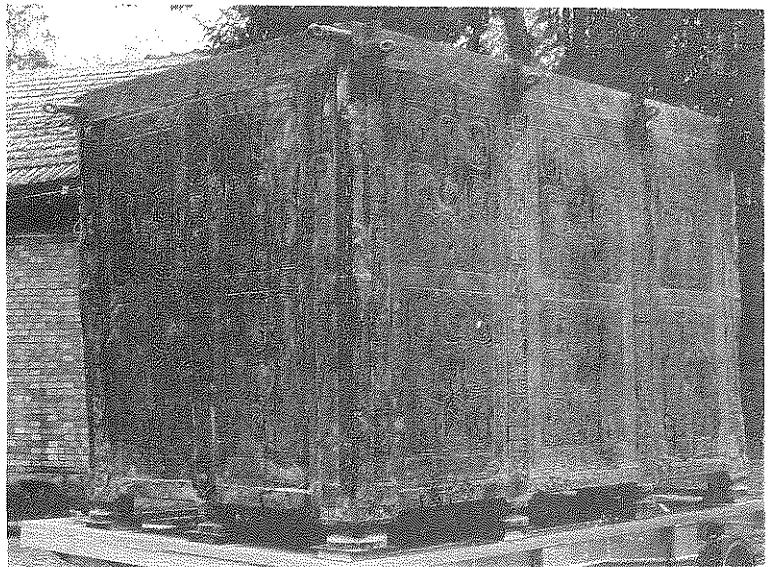
このプロジェクトのきっかけとなったのは国立東京博物館と湖北省博物館の間の長年にわたる協力関係である。とくに、東洋の漆器の大家である東博の学芸部長の西岡先生のご努力に負うところが大きい。

先の杭州から長江をさらにさかのぼり、ほぼ長江の中流域に位置する武漢三鎮のひとつ、武昌市にある湖北省博物館は、豊かな生産力とその上に古くから花開いた長江文明の文物の宝庫である。とくに、艶やかな漆器や精巧な青銅器铸件のコレクションには驚かされる。曾侯乙墓から1978年に出土した4,000点余の出土品は、いずれも紀元前5世紀の春

秋戦国の時代の雰囲気をもぎまぎと伝えるものばかりであり、今回修復の対象となった巨大な漆棺に描かれた絵柄も何とも言えないダイナミズムを感じさせる。

外棺（下の写真を参照）は外寸が3.2、幅2.1、高さ2.2、（厚さ0.1）メートルの大きさであり、内棺はこれより一回り小さい。包山二号墓から1986年に出土した内棺も含め、三つの漆彩棺は水を噴霧することで出土時の状態を維持してきたが、木質部や青銅の骨格に痛みが出てきたため、樹脂を浸透させるグリオキサール法による脱水・固定の処理を1992年より開始した。財団はこの作業に助成を行ったが舒之梅館長、陳中行研究員等の努力により本年半ばに修復作業は成功裏に完了した。

われわれ関係者は、この素晴らしい漆工芸品が中国側の努力で見事に蘇ったことと、日本側もささやかではあるがお手伝いをしたことから、この漆棺を中心とする展示会を日本で開き、そうすることで日中の文化交流をさらに進めることに資したいと願っている。



## 新刊紹介

## 「満族の家族と社会」

愛新覚羅顕琦・江守五夫 共編

第一書房 刊(96.4.5)

A5判 288頁 3,399円

本書は1990,92年度の助成による「満族文化の基礎的資料に関する緊急調査研究」の成果である。急速に変容しつつある満族文化の中でも家族慣習に焦点を当て、第一部では民俗調査、第二部では歴史研究および周辺民俗との比較研究の視点から、国際的・学際的共同研究の成果がまとめられた。執筆者は、愛新覚羅顕琦(満学協会総裁)、烏丙安(遼寧大学教授・中国民俗学会副会長)、植野弘子(茨城大学助教授)、小熊誠(沖縄国際大学教授)、李鴻彬(中国人民大学清史研究所教授)、劉小萌(中国社会科学院近代史研究所助教授)、江帆(遼寧大学助教授)、巴達榮嘎(内モンゴロ社会科学院教授)、江守五夫(東京家政大学教授)の各氏である。

代表の愛新覚羅女史は序言でこう記す。「私は、満州族の血を引く、清朝王族の一人ですが、私が生まれたとき、清朝は既に滅亡していました。…」そして日本で教育を受け、「日本人の心をもった中国人」として「日中友好」を最大の関心事と考えてきたという。本書は、日中研究者による学際研究という、これからの地平への里程標となるべき成果であろう。(M.K.)

## 「石橋幻影～甲突川から消えた鹿児島五大石橋～」

樋渡直竹・写真集

文化ジャーナル鹿児島社 刊(96.8.11)

A4判 65頁 3,900円

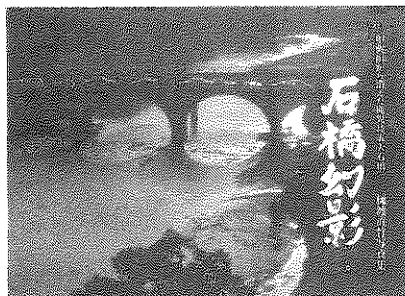
150年前、肥後の名石工・岩永三五郎

らによって架けられた鹿児島の甲突川五大石橋。その解体・撤去に当たっては全国的に様々な論議を呼んだが、これらの橋は日本の石橋文化の最高峰であっただけでなく、貴重な歴史的土木遺産でもあった。

当財団では、かごしま防災文化フォーラム(代表・上野敏孝)による「鹿児島・甲突川水害後の地域づくり～石橋を生かす防災文化の創造～」に対して、1994年度市民活動助成を行った経緯がある。そこでは、93年に発生した8.6水害後の復興に際して、行政主導によって進められてきた河道拡幅計画と併せた石橋撤去の問題に対して、自然保水力の回復で川の負荷を減少させることによる防災と文化財(石橋)との両立に向けた市民レベルからの問題提起と代替案の提示を含めた活動が展開された。

最終的には、唯一残っていた西田橋も、多くの市民に惜しまれながら本(1996)年5月には解体・撤去され、五石橋の姿は甲突川から完全に消えてしまった。

この写真集は、永年にわたり石橋を撮り続けてきた地元の写真家・樋渡直竹氏の手になるもので、鹿児島島の街に息づき、人々の暮らしと共にあった石橋の姿を、未発表を含む数々の貴重な写真により魅了させたものである。入手ご希望の方は文化ジャーナル鹿児島社(099-224-6331)まで連絡を。(G.W.)



## 「リトアニア」—小国はいかに生き抜いたか— (NHK ブックス)

畑中幸子 著

日本放送出版協会 刊(96.8.30)

B6判 224頁 850円

著者の畑中氏は1991,92年度に財団の研究助成により「ヨーロッパ周縁地域における民族問題と移民・難民」と題する共同研究を行っている。本書成立の背景にはこの研究があるのだが、しかし本書はその成果の学術報告書ではない。これは自身のあとがきにも記されている。

畑中氏が本書を執筆した第一の理由は、氏がリトアニア滞在中にヒアリングを行った元パルチザンの人々から、リトアニア政府や一般市民からも無視されていた自分たちの歴史に極東の一研究者が関心を持ってくれたことへの感謝とともに、その歴史をぜひ日本人に伝えたいと懇請されたからである。

話者のライフヒストリーに重きをおいた分、リトアニアの年代史としては記述が前後することも多い。しかし、リトアニアの人々の生の声を伝えたいという著者の意図は十分満たされているものと思う。(M.K.)

## 「満洲「大陸の花嫁」は

どうつくられたか」

—戦後教育史の空白にせまる—

相庭和彦 他 著

明石書店 刊(96.9.30)

四六判 504頁 5,871円

共著者6名の、相庭和彦、大森直樹、陳錦、中島純、宮田幸枝、渡邊洋子の各氏はいずれも戦後生まれの研究者である。ともに1930年代の教育史に関心を寄せ、1991年に「大陸の花嫁」を主題とする研究会を発足させた。財団はこの研究会に1992,93年度の研究助成を行い、

それによって大陸の花嫁経験者自身やそれに関わった関係者からの多くの証言資料の収集が可能となった。

本書はこの成果をもとに、社会教育史の視点から「花嫁」たちがいかなる社会的形成力によって「つくられて」いったのかを総合的に分析・考察したものである。大陸の花嫁の実像を描く第1部、その養成のメカニズムを描く第2部に加え、特論として中国人執筆者による「開拓移民政策による中国人民への災難」、「中国人からみた「大陸の花嫁」」の2編と、また現代の課題につながる「大陸の花嫁」の戦後I編とが収録されたことで、主題に即ちそのふくらみが与えられている。(M.K.)

#### 「移住と適応」

中国帰国者の適応過程と援助体制に関する研究

江畑敬介、曾文星、箕口雅博 編著  
日本評論社 刊(96.10.20)  
A5判 504頁 8,240円

財団は本書執筆者の江畑敬介氏を代表とする「中国帰国者の適応過程に関するプロスペクティブ・スタディ」の研究に1989年から93年までの4年間助成を行った。助成開始当時、江畑氏は都立松沢病院の精神科の医長であったが、氏が厚生省援護局孤児対策室の依頼により中国帰国者の適応状況についての調査に取り組み始めたのはさらに2年前の1987年にさかのぼる。本書は、この長期にわたる調査と研究の集大成にあたる論文集である。初出論文のもっとも早いものは1989年で、以後1996年までに発表された17編が新規の論文とともに本書の中で再構成された。

本研究の特徴として、実際に被調査者の援助を行いながら進められたアクシ

ョン・リサーチである点できわめて社会性が高いといえる。また、それに伴い、適応過程に関与すると考えられる諸要因を仮説検証の立場から抽出し、それら諸要因をきわめて包括的に含んでいることも実践的である。そしてなにより、800名にのぼる対象者の帰国直後から定住後3年にわたる期間を、回顧ではなく、プロスペクティブに追跡し得た点でまことに貴重な業績といえよう。(M.K.)

#### 「ホームエデュケーションのすすめ」

東京シューレ 編  
教育史料出版会 刊(96.11.1)

B6判 246頁 1,545円

「わたしはうちでやっていきたいの！～成長の多様性をひらくホームスクーリング」これは、1994年の9月に都内にて開催された東京シューレによる国際シンポジウムのタイトルだ。

近年、日本では、登校拒否・不登校等が激増している。そして、これらの子どもたちを無理に学校に引き戻そうとする試みは、かえって本人を苦しめ、追い詰め、自己否定感を強めるばかりで、問題の解決には至らないことが理解されるようになってきた。重要なことは、学校・学歴偏重の価値観の見直しと、一人ひとりの個性を認め、その子らにあった成長への援助が多様に存在することであろう。

東京シューレは、1985年に開設した学校外の子どもたちの居場所であり、日本のフリースクールの草分け的存在として広く知られている。当初は通学の形で子どもたちの学習権保障の場として展開していたが、在宅の形で過ごしている圧倒的多数の子どもたちへの援助の一環として、最近では「ホームシューレ」なるプログラム(このための基礎調

査は、当財団の市民活動助成を得て実施)も提供するようになってきている。

本書は、日本におけるホームエデュケーションを第1章に、その必要性と現実性について述べられており、第2章ではホームシューレの実態について、その歩みや関わった子どもたちの手記なども含めて詳細な報告が盛り込まれている。ここでの提言は、不登校の子どもたちを励ますのみならず、行き詰まりを見せる日本の教育に一石を投ずる内容であり、一読を勧めたい。(G.W.)

#### 「ヤシの実のアジア学」

鶴見良行・宮内泰介 編著  
コモンズ 刊(1996.11.15)  
A5判 354頁 3,296円

鶴見良行氏の方法論は、歩き、見、食べ、さわ、聞くという、いわば五感を総動員した対象の理解ということに集約されるだろう。「バナナと日本人」(岩波書店1982)に始まる、ひとつのモノを切り口に世界を拓くという手法は、多くの同志を集め、「エビ研究会」そして「ヤシ研究会」へと発展してきた。その都度、対象は複雑さの度を増し、研究の成果は三段跳びのごとくに到達点を伸ばしてきた。

本書は1988年から1994年まで続けられた「ヤシ研究会」の成果である。財団はそのうち1990年からの3年に助成を行った。第一部「ヤシと日本人」でまず、我々の日常生活にいかにかヤシが深く関わっているかを知る。食用油脂、洗剤、活性炭、そしてタワシ。それぞれに1章が当てられ、奥が深い。第二部「ヤシのある暮らし」では、インドネシア、フィリピン、マレーシア、スリランカ、タイのそれぞれの地域のヤシのある暮らしを旅する。第三部「商品化と多国籍企

業・プランテーション」で第一部と第二部の世界にまたがる現代の構図が描かれる。

著者たちはヤシ研究を楽しんだという。それが市民研究の神髄だろう。読みながら、おもしろさは十分に伝わってきた。

鶴見氏が最後の着地を見ずに亡くなられたことが惜まれる。(M.K.)

「多文化共生をめざす地域づくり～横浜、鶴見、潮田からの報告～」

沼尾 実 編

明石書店 刊(96.11.30)

B6判 205頁 1,854円

横浜市鶴見区の潮田地区は、京浜工業地帯形成期の1920年前後から朝鮮人や沖縄出身の労働者の集住が始まり、太平洋戦争に伴う朝鮮人強制連行、沖縄地上戦を経て、戦後も多数の定住化が進んできた。1990年の「入管法」改正後、主に南米からの日系人の出稼ぎ労働者とその家族も集住し始め、多文化が混在する地域となっている。

その一方で、この地域には、在日韓国・朝鮮人、沖縄出身者、外国人労働者に対する根強い差別意識が残っているのも現実で、そのため、彼らはそれぞれのエスニシティーを保持しながら生活しつつも、それらを簡単には表面に出しにくい状況にある。

“内なる国際化”がすすむこの地域で、民族のアイデンティティー確立の支援と弱い立場や被差別の状況にある子ど

もたちに焦点を当てる活動、および、時代を担う若い世代に対して違いを認めあい共生をめざす地域づくりの取り組みが1993年から始まった。

本書は、外国人児童生徒とその親たち、教職員、地元市民、ボランティアが参加したこの外国人児童生徒保護者交流会の多彩な活動を、参加者の思いも含め、詳細に紹介している。各地で国際化のすすむ昨今、同様な課題に直面している多くの地域にとって参考となる一冊であろう。なお、当財団では同交流会の活動に対して、1994年度市民活動助成を行った。(G.W.)

### Up to Date

#### ◆第78回トヨタ財団理事会を開催

トヨタ財団は第78回理事会を1996年10月7日(月)都内にて開催した。1996(平成8)年度の各助成対象に関する審議と決定が行われた(P1に関連記事)。

その結果、合計229件、総額3億3,429万円の助成を決定した。

#### ◆平成8年度助成金贈呈式を開催

1996年10月23日(水)、今年度の助成金贈呈式を都内ホテルにて開催した(P1, 2に関連記事)。

#### ◆助成対象一覧および概要について

トヨタ財団では、助成プログラムに関する以下の小冊子を提供している(郵送料は希望者負担、カッコ内は郵送切手代)。

・研究助成対象一覧と概要(190円)

・東南アジア関連プログラム(270円)

なお、上記両方希望に際しての郵送切手代は270円となっている。詳細については、トヨタ財団1996年助成対象一覧係まで。

#### ◆1996年度市民活動助成には218件の応募

1996年10月15日より12月15日まで基本テーマ「見直そう地域と生活」のもと公募を行っていた1996年度市民活動助成には218件の応募があった。昨年度までは年2回公募を実施していたが、今年から1回としている。

選考は、1996年12月から1997年3月にかけて行われ、3月下旬には助成対象が決定される予定となっている。

#### 編集後記

あけましておめでとうございます。

この号の発行は12月となっていますが、皆様のお手元に届くのは新年になると思います。

1996年を振り返ってみると、個人的な感想としては前半は特に関心をひくような話題がなかったかなという気がします。しかし、後半には「複雑系」「資本主義」「民主主義」といったテーマにスポットがあたったという印象です。

多分、これらのテーマは1997年もしばらくの間、取り上げられるのではと思いますが、いかがでしょうか?

1997年もよろしく願いいたします。



## トヨタ財団レポート No.78

このレポートを継続してご希望の方は、お薬箱にて財団までお申し込み下さい。

発行日 1996年12月27日  
発行所 財団法人 トヨタ財団  
発行人 黒川千万喜  
編集人 田中 恭一  
印刷 真友工芸株式会社